
ねじまきララバイ

瀬戸美月

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ねじまきララバイ

【Nコード】

N2696E

【作者名】

瀬戸美月

【あらすじ】

両親を亡くした漣は疎遠だったピアニストの祖母に引き取られたものの、お互いギクシャクしてばかり。命じられた草むしりを嫌々していると、庭の片隅で奇妙なネジを見つける。それは封印されたオルゴールのネジで……。頑固な祖母とひねた孫息子の反発と愛情が織りなすファンタジックなファミリーコメディー。

夏休みだっつーの。おまけに、どんな仕事熱心な農家だっつーいい加減引き上げるであろう午^{ひる}近く。何が悲しゅうてタオルを頭に巻き、身体中からダラダラ汗流してだっつー広い庭で草むしりなんかしてるんですか俺。ハイ、それは自業自得というやつです。合掌。

汗でびっしょりぬれた背中を、パワー全開の太陽がこれでもかとはかりに容赦なくジリジリ焼いてる。焦げるっ、焦げるうっつ。俺になんか恨みでもあんのかコラ。

ああ、もうメルトダウン寸前。死ぬ。

ガーデニングなんてオサレなもんじゃない。単なる労働。しかも駄賃も出やしねえ。

草むしりなんて早朝やればいいって？

そんくらいわかってるさ。しかしねえ、高一の男子が夏休みに早起きなんかするわけねーじゃん。暑さのあまり目が覚めたくらいだぜ。加えて蝉の大合唱。暑苦しいったらない。

くそっ、汗が目に入った。軍手の甲で目をこすり、ついでに汗まみれの額もぬぐう。瞬間、眩暈がした。青臭い草いきれと熱気で頭が朦朧としてくる。

「あんのクソババア、クソババア……」

はびこる雑草を力任せに引き抜きながら、呪文のごとく際限なく。どうも目が据わってきたような気がする。そろそろ限界っぽい。

しかし期限は明日まで。そして庭は広い。サラ地にして分譲したら三軒くらいはゆづに建つ。まったく、古いだけあって無駄に敷地をとってやがるぜ。言っておくがここはもともと俺んちではない。クソババアの持ち家だ。

つい二か月前まで会ったこともなかった（つーか、とつくにくたばってるものと思ってた）父方の祖母。なんでも親父が母さんと結婚して死ぬまでのあいだずっと音信不通だったとか。よっぽど母さ

んが気に食わなかったのだろうか、いつそ天晴れなほど頑固なババアだ。あん畜生めえ。

『私が戻ってくるまでに、とりあえず庭をきれいにしておきなさい』
は？ この密林を、っスか？

『庭木は植木屋さんに来てもらうからいいわ。草むしりだけしておいて』

だったら草むしりも植木屋にやらせるよババア。 と、心の中でスゴんでみる俺。

『一週間あるんだから、毎日少しずつやればどうってことないですよ。若いんだし。規則正しい生活のためにもいいと思うわ。早起きして朝のうちにやらないと暑くて大変よ』

えーえー、確かに大変ですともさ。だからといって早朝労働するほどのやる気もございません。でもってババアの言いつけをシカトするほどの度胸もない、弱気な俺。

腕を組み、昂然と俺を凝視するババアは、真っ白な髪をきれいにセットして、ちよつとクラシックな、かといってけっして古くさくは見えないスーツに身を包み、妙な気迫に満ちていた。どつかの侯爵夫人とかみてえ。この暑さにほとんど汗もかかない。化け物だ。こんなのが実の婆さんなんて怖エよ俺。

『それから、ピアノの練習も欠かさないこと。ずいぶんサボってたみたいだからね』

おふくろが死にかけてたってのに、のんきにピアノなんか弾いてられっかよババア！

と、これも心の中で叫ぶ。現実の俺は頬を引き攣らせて頷いただけ。はあ、情けないっスね。ババアは器用に片方の眉だけをはね上げた。

『お返事は？』

小学生かよ、と思いつつ。

「……ハイ」

しかつめらしく頷くと、ババアはでっかいスーツケースを後部トランクに詰め込んだ黒塗りのハイヤー（タクシーではない）に乗り込み、颯爽と出かけて行った。

そして後には俺ひとりが残されたってわけ。密林（化した庭木）に埋もれかけた、倒壊寸前かと思紛う古い洋館に。

実際、この家はご町内で無人の廃屋と思われてた。それどころか幽霊屋敷の噂までたつてたんだぜ。

スーパールのレジ袋を両手にさげて錆の浮いたご大層な鉄の扉を開けようと四苦八苦してたら、角の辺りで近所の主婦とおぼしき中年女性たちが声をひそめて（るつもりで）しゃべくっているのが聞こえてきた。

「あらっ、ここ人が住んでたのねえ」

「てっきり空き家だと思ってたわあ」

「ここ、幽霊屋敷なんですってよ。白髪のお婆さんの幽霊が出るんだって。見た人が何人もいるのよ」

それは幽霊じゃなくて生身のクソババアだよ、おばはん。

聞こえないふりをして、白い歯をキラリンとさせつつ会釈してやると、主婦たちは一斉に浮足立った歓声を上げた。そして好奇心いっぱいのまなざしで、俺が門の中へ入っていくのを見送ったのだった。暇人どもめが。

バチン！ 俺は自分の二の腕を引っばいた。でかいヤブ蚊が血まみれになって圧死している。見れば蚊取線香の煙はつつましくもひっそりと途絶えていた。そろそろ潮時。水分補給しなけりゃ干からびて死んじゃう。

これが最後、っと引き抜いた雑草の根元でキラリと何かが光った。汗のしみた目を瞬き、俺はむしった草を眼前に持ってきた。

「……何だア？」

何か、金属片のようなものが根っこに引っかかっている。プチプチと根をちぎり、軍手でこすってみると、驚くほど鮮やかな金色が現れた。錆びてもないところを見ると、鉄やメッキじゃないらしい。

「鍵……かな？」

にしてはちよつと変だ。羽のようなツマミが端につき、反対側の端はただの直線になっている。古い型の鍵の、先端部分を切り落としたような形だった。

雑草を引き抜いた辺りを探してみたが、なくなった部分らしきものは見当たらない。羽がついている方の反対側から見みると、中が空洞になって土が詰まっていた。

どうせただのゴミだろうが、ちよつと気になった。ここには古い家にピッタシな古ぼけた鍵つき家具だの何だのがたくさんあるのだ。明日にはババアも帰ってくることだし、確かめてから捨てても怒られやしないだろう。別にババアのご機嫌をとろつってんじやないからな。絶対違つぞ。誰がそんなこと。

立ち上がると、ずつとしゃがみ込んでいたせいか膝がジンジンした。俺は外したタオルで顔の汗をぬぐいながら母屋へ戻った。

冷蔵庫から取り出した2リットル入りのスポーツ飲料を、直にガブ飲みする。古びた台所には不釣り合いにも見える最新式の大形冷蔵庫だ。

今までババアは小洒落たマンションで気楽なひとり住まいをしていたのに、どういう風の吹き回しか俺と同居を決めると長年他人に管理を任せつきりにしていた持ち家に戻ってきた。そしていの一歩にこの冷蔵庫を購入したのだ。

しかし俺とババアのふたりきりなのに、無駄にでかくねえか？もったいない。俺としちゃ最低限の生活費と学費さえ出してくれ

たら、一人で暮らしていけるくらいの生活力はあるつもりなんだけどな。

ババアだって気まずいだろ。一度も会ったことのなかった孫といきなり同居なんてさ。それとも年寄りだけに義務感が強いのかな。はあ、うざいねえ。

シャワーを浴びるついでに庭で拾った鍵みたいなものも洗ってみた。きれいに土を落とし、タオルでよくよく拭いて、改めて眺める。うーん。やっぱり金……、のような気がするが、違つかも。

カネになりそうにないのは確かだな。それでも一応、どこかに紛れてしまわないようにリビングの真ん中に鎮座ましますグランドピアノの上に置いとくことにした。

「さて、メシメシと……」

台所に戻り、ばかでかい冷蔵庫から冷し中華の麺や具材を出していると、携帯が鳴った。誰だろ？ おっ、高梨じゃん。

中坊時代からのなじみだ。せつかくクサレ縁で同じ高校に進学したのに俺ってばひとりさみしく一学期で転校よ。受験勉強で詰め込んだ知識がまだ消滅してなくて助かったというか。

編入試験は入試より難しいって言うだろ。まあ、前の学校よりレベルが低かったのさ。チエツ、損した気分。それともババアの威光か？ ババアの七光なんてまっぴらだぜ。

そんなことを脈絡もなく俺はまくしたてた。高梨はうんうん相槌を打ってくれる。

「んー、職員室まで挨拶には行っただけど。ちょうど夏休みに入っちゃったからなあ」

携帯を肩と耳の間に挟みながら、俺は鍋に水を汲んだ。

「何？ 女子？ 知らねーよ、まだろくに見てねーもん。しかしあつちーよなあ」

沸騰した湯の中に麵を突っ込む。ついでに卵も茹でてやれ。

「ん？ いや、ひとり。婆さんはずっと出かけてさ。うん、どっかのイベントで公開レッスンとか何とか。ピアニストなんよ」

菜箸でぐるんぐるんと豪快に麺をかき回す。卵が鍋の中でごろごろ転がった。

「……別にそういうんでもないけど。練習しとけって言われてさあ、やんないわけにもいかねーじゃん。おつかねー婆さんなんだぜえ。サボってたら定規で指を引っぱたかれるかもー。なんちて、ぎやはは」

俺はキュウリとハムを刻み始めた。

「えー？ いや、遊びに来てもらいたいのにはヤマヤマなんだけど、明日、婆さんが帰って来ちまうんだよな。なーんかまだそういうの、言い出しづらくてさ。なあ、近々皆で会わねえ？ 海行こうぜ、海ー。現地集合ってことでさ。うん、その辺りに声かけといてよ。さんきゅー。そんじゃまたな」

折り畳んだ電話をタオルの上に放り投げ、茹だった麺をざるにあける。鼻唄まじりに蛇口から勢いよく水を流して麺を冷やす。適当な器に盛って細切りキュウリとハムを載せ、ふたつに割ったゆで卵をポン。我ながら感心しちゃう手際のよさ。いいねえ。

俺は何でもできちゃうのさー。料理も掃除もボタンつけも。勉強はつねに学年三位内。帰宅部ながらスポーツも得意。よく運動部の助っ人を頼まれた。おまけに親父譲りの才能で（断じてババア譲りではない）ピアノも弾ける。去年コンクールで優勝しました。えへん。

性格は明るく、場を盛り上げるジョークも忘れない。礼儀正しく挨拶はきちんと。ご近所にも教師にも評判は上々。なっ？ 文句のつけようがないだろ。天は二物も三物も与えるのだよ。才気煥発、眉目秀麗、明朗闊達、それは俺様。はっはっはっ。

母さんはそんな俺が何よりの自慢だった。親父が死んでから、母さんは俺だけが生きが이었다。看護師をして親父が残した借金（もともと他人のだ。保証人には死んでもなっちゃんカン）を返しつつ、俺にピアノを習わせ、有名な先生にみてもらうために新幹線でレッスンに通わせてくれた。

コンクールで優勝したら、母さんは涙を流して喜んだ。その時も、母さんは余命いくばくもなかった。

しみじみ、母さんが生きてるうちに優勝できてよかった。きつと満足して逝ったと思う。

いろいろあつて親父がピアノを断念したことを知ってたから、母さんはどんなに貧乏しても俺には続けさせようとした。ピアノを弾く俺を眺める母さんはとても幸せそうだった。

母さんが見ていたのは、俺じゃなくて親父だったのかもしれない。天涯孤独で薄給の準看護師だった母さん。たまたま病気で来院した親父と知り合ったんだつてさ。ロマンスだろ？

ところがプライドばかり高いババアがどうしても認めてくれず、駆け落ち同然で一緒になった。その親父も俺が小学校に上がる寸前に死んでしまって、買ってくれたランドセルが形見に。今でも捨てられず、一緒に引越してきたよ。ババアには絶対内緒だ。

コンクールで優勝して、いずれはプロの演奏家になって母さんに楽させてやろうと思つたのに。優勝すれば母さんが喜んで病気が治るかもつて思つたのに。

ほら、ずっと憧れてた青い蝶々を見て感動して脳腫瘍がきれいさっぱり消えたつていう男の子の実話があるだろ？

母さんは確かに喜んださ。俺の演奏の録音テープを病室で繰り返し聴いてた。そして聴きながら逝っちまった。俺の優勝には青い蝶々ほどの効能はなかったんだな。

『連シは大丈夫ね？　ひとりで行けるわね……？』

『大丈夫さ、母さん。そんな心配しないで早く良くなって、一緒に家に帰ろうよ』

でも、母さんは死んで。俺はピアノを弾かなくなった。

はっ。うっかり思い出にひたつていたら麵が伸びてしまった。いかんいかん。

俺は自分に喝を入れるように、目の前ではんっと大きく掌を打ち合わせた。

「いただきますっ」

伸びた麺を黙々とすする。少しぬるい冷し中華。母さんが作ってくれた方が、断然おいしい。鼻の奥で塩味が加わる。喉越し最悪。

後片付けをして昼寝でもと思ったのだが。俺はババアのご立派なグランドピアノをむっとり眺めた。家にあったのは、中古のしかたアップライトピアノだったよな！

ババアのグランドピアノは当然ながらピカピカ。家が一軒建つとかいうほどの逸品ではないが、結構なシロモノだ。しかし俺は一度も弾いていない。毎日練習しておくように言われてハイと答えたものの、最初からやる気なんてなかった。でも、やっぱり気になって側を通るたびに横目で睨んでた。うう、弱気な俺。いやいや、根が真面目ですから。

深あい溜め息をつき、ピアノの蓋を開けた。椅子に座り、鍵盤を眺める。

やめとけよ、おい。もう三か月も弾いてないんだぞ。この一週間、朝から晩まで弾いてたのならともかく、たった一日練習したくらいで取り戻せるもんか。ババアだってプロだ。言いつけどおり練習しなかったことくらい即座にバレる。

けっ、命令なんか無視だ無視。ピアノを弾かないんなら追い出すってか？ だったら出て行ってやるよ。俺は生活力はあるんだ、どうにかならあ。皿洗いでも便所掃除でもやってやる。ふん、見てろよババア。

心の中で気炎を上げつつ、俺は八つ当たりのように鍵盤を叩いた。適当に指を載せただけなのに、それは偶然にも綺麗な和音になって響いた。俺はアホみたいに天井に向かって顎を突き出した。ああ、いい音……。

玲瓏たる余韻がいつまでも耳の奥に残る。

ヤバイ。なんつーか、すんげえヤバイ。
弾きたい。

俺はコンクールで弾いた曲をいきなり弾き始めた。突っかかって
もお構いなし。間違えましたよ、それがどうしたオラア！

ひたすらクレッシェンド。滑ってもコケてもすっ飛ばしてもとに
かく走る。早く、強く、ガン、ガン！ ガン！！

かのフランス・リストは激しい演奏のあまりしょっちゅうピアノ
を叩き壊したという。だからいつも予備のピアノを用意してたんだ
つてさ。はー、格好いい。やっぱピアノは格闘技だ。しかし
。

俺は鍵盤の上につ伏した。滅茶苦茶な不協和音が今の俺にぴっ
たりな効果音。

「……へたくそ……」

我ながら呆然としちまうぜ。三か月のブランクはやはり大きかつ
た。全然弾けない。

つーか俺、今さら弾く意味あんのか？ 母さんはもういないのに。
俺は母さんにそんな無理をさせてまでピアノをやりたくなかなか
かったんだ。でも、そんなこと言えるか？ 母さんは俺に人生賭け
てた。母さんにとって俺のピアノは若死にした親父の代償。プラス、
ピアノリストの姑に対する意地。いつか俺がえらくなって、ババアを
見返してくれると期待してたに違いない。

俺がピアノの代わりにバイトでもして家計を助けてれば、母さん
は病気にならないですんだのかもしれない。母さんを喜ばせたくて
いろいろ頑張ってきたけど、肝心の母さんが死んじゃったんじゃあ、
話にならねーよ。

ねえ、母さん。俺もう頑張らなくてもいいかなあ……？

俺は鍵盤にそっと指を置いた。今度はシンプルなソナチネ。親父
が作った曲だ。幼い俺を膝の上に乗せて、よく弾いて聞かせてくれ
た。目の前で動き回る親父の指は長くて力強く、同時に優しく美し
かった。わくわくした。大好きだった。その頃親父はもうあまり弾

けなくなっていたのだと、後になって知った。

親父は楽譜を残さなかったから、記憶だけが頼りだ。忘れないように時々弾いてたが、母さんはこの曲があまり好きではないようだった。この曲を弾くと、いつも母さんは背中を向けていた。それとも親父を思い出して泣いていたのかな。

最後の音が微かに空気を揺らして溶け、蝉の声が戻ってきた。ふと何かの気配を感じて振り向く。

部屋の入り口にババアが立っていた。俺は椅子から飛び上がった。帰りは明日じゃなかったのかっ!?

ババアの顔は何故だか妙に青ざめていた。いや、それとも俺のあまりのへたくそさに唾然呆然の態なのか。

「どうしてその曲を……?」

「……あ。親父がよく弾いてくれた曲で」

ババアは一層青ざめたかと思うと、今度は急に無表情になった。

石膏のお面みたいだ。俺は立ち上がったままもぞもぞと身じろいだ。

「あー、帰りは明日だったんじゃない?」

「予定が変更になったのよ」

なんだよ、くそー。そんなら電話の一本くらいしろよな。こつちにだっているいる都合があんだぞ。そつなく取り繕うにも、事前に心の準備つてもんが必要なんだ。

ババアは相変わらず黙りこくってピアノを眺めている。う……、なんか気まずい。さつさとどっか行ってくれればいいのに。

と、ババアは巖のような顔を俺に向けた。おい待てよ。まさかこのまま特訓するとか言い出すんじゃないやねーだろな!? 「冗談じゃねえっ。」

気を逸らそうと、俺はとつさに目についた例の金属部品をババアに突きつけた。

「あのこれっ、庭で拾ったんですけどっ」

ババアは眉をひそめ、つかつか歩み寄ると俺の手からそれを取り上げた。寄り目気味にじーっと物体を睨む。なんでこういちいち睨

むんだ。怖エんだよババア。

「ゴ、ゴミですよねっ。そうですねっ。捨ててきますっ」
そのまま逃亡するぞ俺は。ババアの怒りが収まるまで、どこでもいいから避難だ。

しかしババアはものも言わずにじつと鍵みたいなのを凝視してる。そのうちに表情が変わり始めた。おおい、また青ざめてるぞ。

ババアは震える声で囁いた。

「これを、どこで……?」

「に、庭です、その……」

反射的に指さしたそこは、ちょうどリビングの窓から見える一角だった。草むしり労働の最前線。ビフォーアフターがありありとわかる。ヤ、ヤバイ。

「あっ、あのっ、草むしりはちょっとばかり遅れてまして……」

「もういいわ。あとは業者にやってもらう」

だったら最初からそうしろババア！俺をイビって楽しんでんのかっ。

心の中で息巻く俺を尻目に、ババアはリビングの一角にある飾り棚に向かった。ガラス戸を開け、中から陶器の人形みたいなものを取り出す。いきなり何だ、オイ。

それは西洋の貴婦人をかたどったものだった。ロココとかそういうやつ。小さなパラソルを斜めにさしたドレスの貴婦人が、淡い微笑を浮かべながら優雅に身体を傾げている。

ババアはそれをピアノの上に置き、俺から受け取った鍵みたいなのを人形の台座に開いている穴に突っ込んだ。びっくりして見ていると、ババアは鍵を一定方向にねじり始めた。キリキリ、という音が小さく聞こえる。

そうか、これは鍵じゃない。ネジだ。

金属質の音が鳴り、人形がゆっくりと回り始めた。オルゴールだ。俺が拾ったのはオルゴールのネジを回すためのツマミ部分だった。それにしてもこの曲。どこかで聴いたことがあるような……?」

んっ？ まさか……。

俺は目を睜り、思わずババアを見た。

「これ……親父が作った曲……」

「違うわ」

がくつ。無情にもババアは即否定。啞然とする俺には目もくれず、ババアはいくばくか和らいだ表情でオルゴールを見つめた。

「これは、純の父親が作った曲よ。それをオルゴールにして私にくれたの」

えーと。純つてのは親父だよな。つまり親父の親父。あ、俺の爺さんか。つまりはババアの連れ合いだ。

「あの人は純が生まれる前に死んでしまった……。これはあの人が遺してくれた純のための子守歌よ」

親父はこれを聴きながら育ったってわけか。それをピアノ曲にして、俺に弾いてくれたんだ。不意に親父の大きな手が脳裏に蘇った。いつも懐かしむように弾いてくれた曲。そうか、そういう思い入れのある曲だったのか。

「でも、どうしてネジが庭なんか……？」

訊くでもなく独りごちると、ババアは我に返ったようにすつくりと背中を伸ばし、庭を見た。答えたババアの口調は淡々としながら少し苦しげにも響いた。

「純が捨てたのよ。あの日」

「あの日？」

「どうしても美彌子さんと一緒になると言っつて、家を出て行った日」

美彌子 母さん。

「あなたも知っているでしょうけど、私はふたりの結婚には反対だった。美彌子さんが純に相応しい相手とはどうしても思えなかったの。だからとにかく反対。どんなに頼まれても絶対に会わなかった。

あの日、純は私を懸命に説得しようとしたわ。だけど私はそんな純の懇願を聞くのも嫌で、このオルゴールを鳴らしたの。……さすがに厭味だったわね。純は急に怒りだして。今風に言えばキレた

つてやつかしら。オルゴールのネジを引き抜いて、開いていた窓から投げ捨ててしまったの。『俺はいつまでも子どもじゃない』って言って……。そうして純は出て行った。私は呆然と立ち尽くしていたわ。やがてオルゴールは止まった。それからずっと止まったまま。私は二度とあの子に会えなかった」

しみりと悲しげにババアは呟いた。俺は急にむかむかと腹が立つて怒鳴った。

「何だよ、葬式にも来なかったくせに！」

ババアは眉をひそめ、優雅に回る人形をゆっくりと指でたどった。「知らなかったのよ、あの子が死んだこと。私はだいぶん経つてから人づてに聞いたの。美彌子さんは知らせてくれなかったから」

「えっ……」

そんな。いくら仲が悪くたって、そんなことあるか。

「まあ当然よね。恨まれても仕方ないわ。せめてお線香の一本でもと訪ねていったけど、家に上げてもらえなかった」

ババアの言葉を聞いて、初めて俺は母さんの抱えていた深い闇の一端をかいま見たような気がした。俺にはいつも優しくった母さん。俺がああ曲を弾くといつも背を向けていた母さん。悲しかったんじやなくて、悔しかったのかな。あれが、親父が聴きながら育った子守歌だと知っていたから。

「だったら何で俺を引き取ったんだ。気に食わない嫁の産んだ孫なんか放つときゃいい」

「だって、美彌子さんに頼まれたんだもの」

驚く俺に、ババアは頷く。

「美彌子さん、入院先から連絡をくれたの。だから私、お見舞いに行つたのよ」

そんなこと、聞いてねーぞ……。

「美彌子さん、泣いて謝ってくれたわ。純の死を知らせないでごめんなさい、せつかく来てくれたのに追い返したりしてごめんなさい。謝らなきゃいけないのは私の方なのにね。私のくだらない見

栄や虚栄心のために、ふたりの幸せを台無しにしてしまった。それなのに美彌子さんたら床に土下座までしてね、どうか漣をよろしく頼みますって、泣いて」

母さん。

「漣は素直ないい子だから可愛がってやってください、漣の才能を伸ばしてやってください、って。それで気が済むのなら自分のことを好きなだけ撲ぶつてくれなんて言うのよ。本当になりふり構わなかった。あなたのことが心配で心配で……。ひとり残して逝くのがつらくてたまらなかったのね。で、ふたり揃って病室で大泣き。本当に誰にも見られなくて助かったわ。この年でわんわん泣くのはさすがに照れくさいもの」

何だよそれ。俺ひとり蚊帳の外で、ふたりだけで和解しちゃったってのか？ 大人なんて勝手なもんだ。子供はおろおろしてるうちに遥か彼方に取り残されちまう。

「そのとき美彌子さんと約束したの。何があっても漣は私が守るって。美彌子さん、笑ってくれた。とても綺麗な笑顔だったわ……」
勝手なことぬかすんじゃねえと怒鳴ってやりたかったが、母さんの死に顔が安らかだったのは本当だ。すべての苦しみから解放されたみたいで、すげえ悲しかったけど、よかったとも思った。……そっか。安心したんだな、母さん。婆さんが俺のこと引き受けてくれて、長年の心のつかえも取れて。よかったな……。

オルゴールの音がゆっくりになって止まった。婆さんはまたいっぱいにネジを巻き、幸せそうな人形を眺める。

「不思議な偶然よね。純が投げ捨てたネジをあなたが拾うなんて。あの子が導いてくれたのかしら。まるで、ずっと止まっていた時間がようやく流れ始めたみたい。ずいぶん無駄にしちゃったわ。急いで取り戻さなきゃ」

「……急がないでいいよ」

婆さんがびっくりしたように俺を見た。俺はつい目を逸らす。でもよ、だってそうだろ。親父もおふくろも、あまりに急いで逝っちゃう

まった。だから婆さんよ、このまま俺を放っておかないつもりなら、せめてゆっくり俺に付き合え。

せつかく自慢の息子に育ってやったのに、永遠に親孝行できなくなっちまったんだぞ俺は。可哀相だろうがよ。

ああ、くそつ、何でこんなに鼻の奥が痛いんだ。もつと何気にさりとりたいのに、ぶつきらぼうな口調になっちまう。格好悪い。鼻水出そう。ええい、こうなりややけだ。ずずつと鼻を嚙り、俺は吐き出した。

「急がないで、ゆっくり行きゃあいい」
「……そうね」

婆さんはうつすらと涙を浮かべて微笑むと、思い出したように椅子に腰掛けた。オルゴールに合わせ、曲を弾き始める。

母さんが死んで、安心していた俺の前にこの婆さんが現れた時。

何を今更と反発したけれど、心の奥ではそれと同じくらい安堵していたんだ。

ああよかった。俺はひとりじゃない。まだ身内がいた。父さんが死んで、母さんが死んで、もう俺はこの世にひとりきりだと思っただ。大丈夫、ひとりだって生きて行けるさと強がりながら、震えてしまうくらい怖くて不安だった。でもそれを表に出しちゃいけない。だって俺は『しっかりした子』だから。俺が取り乱したり泣きわめいたりしたら、死んだ母さんが安心してあの世に行けないじゃん。

「大丈夫ね？ 漣はひとりやっていけるわね……？」

大丈夫さ。大丈夫。ほーら、母さん。俺、元気だろ？ 器用に何

でもこなしちゃうし。ひとりだってどうってことないさ。平気平気。

なんて言っさ。

全然、大丈夫なんかじゃ、ない。

俺はひとりになんかなりたくねーよ。俺を置いて逝くなよ、母さん。

そう言って子供みたいに泣きたかった。俺だつてなりふり構わず、鼻水垂らして泣きわめきたかった。でも。母さんを困らせちゃいけ

ない。安心させなきゃ。いつもニコニコしてなきゃ。

だけど本当の俺は、甘ったれなただのガキなんだ。ひとりになるのが怖くてたまらない。会ったこともなかった婆さんでもいてくれて、涙が出るほど嬉しかった。一方ではそういう自分が情けなくて張り倒してやりたいくらい、もうどうしていいかわからなくて。

「ごめんね、漣」

ピアノを弾きながら婆さんが呟いた。

「可愛がってくださいって頼まれたけど、もうちっちゃな子どもでもないし、どうやって可愛がったらいいものやら……。かといって変に甘やかしても美彌子さんに申し訳がたたないし、漣も私を恨んでるだろうし。どうしていいか、わからなかったのよ」

何だ。婆さんも同じじゃん。本音に素直になれないのは遺伝かね……。

俺は婆さんの傍らで、オルゴールの子守歌を高音のキーで追っってみた。キラキラ弾ける音。じわじわにじんでくる涙が熱くて、相も変わらず鼻腔の奥が痛い。

「……ばあちゃん。俺、ピアノ続ける」

「ええ、それがいいわ」

婆さんはオルゴールのメロディに即興を加え、微笑みながら頷いた。

外は炎暑の昼下がり。ピアノの上ではパラソルをさした人形が、涼しげな顔で静かに回り続けていた。

『ねじまきララバイ』 おわり

(後書き)

投稿結果：コバルト短編小説新人賞【もう一步】（相羽みゆ名義）

ねじまきララバイ

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2696e/>

ねじまきララバイ

2008年11月7日07時28分発行